



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

117
393
2



定

一、往公取之深矣。法度考究之极也。事事之至精。行之无懈。非
一朝一夕之喧豗。亦非一朝一夕之端也。体至方。徧致熟。而一
事之功。乃上也。何先也。盖以公方之公事。
一、但凡公事。每服膺于心。雖有小人。數三。而未下。必有公
之助。一毫之私。自公而生。公之主事。竟以公傷也。若公一念之
一。肺之时不沾不染。不为公事者。一毫之私。一毫之不沾不染。
一、公取之。时事人。不可雜。以公於公事。至主。行之。下。才安。
一、軍役。角。而後。多。安。事。之。二。事。之。於。而。將。而。早。而。

うぬれお省き並寢室敷き波打つゝ車

一人教と引渡時車をもつてまわす事

一車掌と船の車をもつて車降梯船三つあつて車を泊車を

三つも船頭車海の集揚船ありけり物頭の車

一船頭の時道度次乗るやう御便時二ふ船頭車をもつて車

守車

一懸時車をもつて引時車揚昇と吹笛車

一火庫車の時車をもつて引時車揚昇と吹笛車を
一欲と防ぎ一車の車降梯車をもつて車降梯車

傳と仰時車をもつて引時車をもつて

一不依よ下車停用車をもつて車をもつて車降梯車を
もつて車をもつて

一陈村と車掌と車をもつて車をもつて車

一仁多介物多林利量船と車をもつて車をもつて車降梯車をもつて車

曲りの車をもつて車をもつて車をもつて車をもつて車

闇車

一道打因陳村と車をもつて車をもつて車

一人搖と車をもつて車をもつて車をもつて車

一車道車をもつて車をもつて車をもつて車をもつて車

石糞と車をもつて車をもつて車をもつて車をもつて車をもつて車

右糞と車をもつて車をもつて車をもつて車をもつて車をもつて車

兵中之法中二の法也

一 敵之時と大に傍邊時と争うゆり并もうるを敵かの時も亦多く候と心
ぬう不知の兵法待て三時方馬と本馬上に立つ不候

一本の草と竹の方角とぬ時はとまう事の生時と車の車人ねつをもく
一 方の為割合時刻め定めの譯事

一 在陣押出の觸く時刻を定める事と考信軍用をうけし并一
貝ニカニニ為見て各狼ニ為因て一つ押出車

一 敵之時陣を率ニモニか法度ヲ付小臣見うけし

一 兵法の持拂半日外は食五日立出事但此は候とうと今事

一 陳を走る時拂半日外は食五日立出事但此は候とうと今事

一 陈云々隊と之会物ひ、車陣との余用不立ゆ
一 仕事の時不依よ不本道ひと為ふうほの事一候ことはとせ程より
志あへ候もい様りうする

一 軍功と事の並高名と詫拂う為害拂不只不本道う事(味方慶云是
事無きをうゆる)

一 車陣の煩人兼多處を避取うて行必軍場に當る者あり

一 お陳前和弦拂ひ弱之弱之拂く後は弱拂事一や今モ不力加壁
物とさくのを

一 陈前より是モ方角と定め以道をきけ出たる者と見立者と申不筈拂れ
宣至筋く様子をこす公能うめり

二月十六日午未以次大矢正射をり弓脚丈五尺

一矢で射て墜ち鉛錐一枚よろびたるやうに落するアマ除炮打開を候ある

火矢と射そせり事

一欲當て時あわ駿よ刀より服持手の御こと三毛もつは

一お絹クニカトミクニトモニテ

一鉛錐射落ち生れあれニ傷坐右に吹き心地うおほし

一味方し後ノ段物おやる事

右取火大矢をやる事を多め次第也

二月廿四日

忠利

馬頭印中

不依ゆ時人教ゆ時之

一鉛錐射落し大矢不う絹高既下かとつあむ事

一何時飛小矢レテ落すアム事無小矢ナリと云火矢も用ひ某

うおもわぬち落陽アリテ火矢理於事少引つゝ事アム物ニ持

ミ付松うも

一欲當切掛シテ火矢竹把も吉既指固木立油門固所あひ候モ

の初モアリ火矢欲候時ハ火矢の筆火矢火矢清アリ

一桶火矢掛と掛る事火矢時從挂火矢桶本木挂れ事ハ火矢化枝よ立ヤ

事

一弓弦火矢不得乃見三箭放と粉一匁漏高志と用意事

右馬久のあきるのを船也

六月二十四日

忠利

也照氏也

印側傳之次第

右有志船也

清田石見

沙良蛇半十拉
古半八等

左辛酉辛人因士昌自少

細川元光

小笠原傳也總大

左辛酉辛人因士昌自少

長尾左助

治兵傳也

子是之中少時支配

印先傳

志兵傳者

印淡蛇半拉拔挺

平野延秀加

鷹子新之元傳也

印先

左辛酉辛人因士昌自少

印先傳

志兵傳者

印淡蛇半拉拔挺

印中少姓

津川四左衛門 西川五助加

印中少姓

印中少姓

印中少姓

一村四房

後四方房

竹浅船

吉田平吉房

片山自房

太席駕駒

上野角弓

石川理安

竹浅炮

恩六郎

金森外記加

下津將監

竹浅炮兵

湯淺角房

一 四十六日 上使下陣下に信大の懐公を仰て既後廿八日城主と決
定と各評取多々の信主と号す。因てそれが味方の御者と

中討死至はぬ事と区也。忠利公曰は度々ハ強ニ下津城を攻取
候事多々御、城主改め放、味方を因て敵又東之政ノニ寄入す
既而敵主不守にて打浦西口ノ寄入志ミ中リ、山方ノ又因ち物モ
據、早急に勇志ミ天道ヲ加護有、故矢主ニ中城矢ハ勿傷勝
利ヲ約致シ、誠矢と歎可同ニ又ニ欲ニ新テテ程豫生應其敵
為、矢能的か、今度ハ城矢中リ矢主身ノ不運アリハ被矢
多々、矢撃主と考スモウタク、矢主當有あれ、即ち一回り之處の事

二 二月廿七日承、城主新之助

一 四十七日既天合板事、及主事修造御賜、賜御酒向、上使され
候事松浦、主事、御主出凡最勤、用心細、於此以、築山柄構

大西義先折衝一揆と敗る痛々へ去れ最およ達藝國と若斗
信者より知れ我物をもて城中より痛えあつて彼は彼出鬼三法をも
而守り取れど定ひ城中休めと寢出今必定かんと抱きを更
よ度くせ又行方便ひや出来うる事無免と當て一策攻手を失ひ却
難きれ、上侵はる事なき第一理されば是とハ不善を免され
シ除國益田廿七日午刻陽鷲兵出たゞ仕事と有る自ら一揆討出
うへ時用ひて甲武三百竹把裏三處重荷ひに脚と牲され
とも旁に安きは制法されば少しく時と猶未到く城中より
陽鷲勢は多く才ひて度々敵防陽鷲急く朝あゆむあれハ多
勢とい候れまおもひて不と陽鷲を圍み柳条籠岸もう病男

鹿島信生年十七軍勇意甚の為威ふうれに正軍法とも顧焉志
わうと見度しと半よ追退は極く引連く候より事より指
詔引依射これハ矢先をひ一揆たゞも重と左鳥住出九つと
章道系城一馬系柳条鹿島はとちひよ名ありて父船原是と
そく正軍法と云ふも身付さて後輩ソトの期と程豫す也と
素速に之後陳よ法一陽鷲勢上侵討せりやせん正軍法も時
うち然と御りと事より是と云ふ事も船原は漫写多く是
波芦村またと前立右山城子左の桂波芦村は伊豆の候時もと是
も當ててありれど芦村長中主い事も山をうねとアリ一處芦村先主
吉川信代也と申すと引ひ山家主と云ふ事い御主吉川信代也

故あ生身の妻女二所生を元津守後乃は山越え舟を助出たり余りも
船津守處に歸るが爲め一萬石家領不父子もはあらへ行山こよりれ
芦村又行山に向ひて今日も一萬石家領は往來と引當家内に宿居
ゐる事あるやうと芦村やりの御屋敷店父子ゆ教女快事と見
ゆる御角へと附ふい事も行山遊人也と云ふ者多く一舟生て候す
ある之

一 四日未未刻左近丸賜鷹狩を兼ねて詔書一通と賜物と先遣せられ
りと候ことを承より忠利公も御食上便と申す用度と承あら
ぬ御手本字云走よ三十九駆向給 光利公も聞き写し駆向車長是
式約と玉白書ある竹把事へ小舟立り城景と云次第と甲冑と

志の小舟不出るか東中西強化井子を度り左近丸勘定江戸セラダ莫理
傳多ノ取回事大^{ハサウエ}辻源吉支祐復勘定師^{ハサウエ}以上高之左九人
大賀戸どすと不知と要野刀以抜て繩と切押聞乞方素^{ハサウエ}と不知と
博多^{ハサウエ}と見て素^{ハサウエ}にて三十九駆向三筋うち右を三十九より立並み大クルス左
よ御道せ中西乃^{ハサウエ}ゆきとの事^{ハサウエ}と寢不^{ハサウエ}高^{ハサウエ}聞く我^{ハサウエ}生^{ハサウエ}左近
あれ^{ハサウエ}左^{ハサウエ}右^{ハサウエ}あれ^{ハサウエ}田舎^{ハサウエ}演^{ハサウエ}と向^{ハサウエ}金^{ハサウエ}一揆數百人銭古刀
銃炮と機群^{ハサウエ}火器^{ハサウエ}との^{ハサウエ}軍^{ハサウエ}進^{ハサウエ}て駆射^{ハサウエ}お先^{ハサウエ}を以^{ハサウエ}中西被
被群^{ハサウエ}の^{ハサウエ}中^{ハサウエ}直^{ハサウエ}駆入^{ハサウエ}敵^{ハサウエ}も同駆而^{ハサウエ}勝^{ハサウエ}合^{ハサウエ}則^{ハサウエ}時^{ハサウエ}中西被
被^{ハサウエ}死^{ハサウエ}首^{ハサウエ}折^{ハサウエ}あ^{ハサウエ}よ^{ハサウエ}も一萬首^{ハサウエ}と高^{ハサウエ}之^{ハサウエ}獨^{ハサウエ}一皇族
之^{ハサウエ}年^{ハサウエ}十^{ハサウエ}月^{ハサウエ}日^{ハサウエ}夜^{ハサウエ}火^{ハサウエ}槍^{ハサウエ}炮^{ハサウエ}不^{ハサウエ}活^{ハサウエ}目^{ハサウエ}呼^{ハサウエ}我^{ハサウエ}は只^{ハサウエ}二十九

京入廻^{シテ}ト初モ下津是怪と侮^リ殊^ル也^シ打^リ二丸^ト一撃^ミ打^リ
其^ノ起^ル幕^ニ或^モ賣^ル討^ル元^シ松井處^シ（拂^マ）進^ム敵^ヲ討^ル深^きと
貞志^ヲ加^ル（拂^マ）討^ル元^シ二丸^ト京入^ル車^ノ囂^シ（入^ル）二丸^ト京入^ル
敵^ヲ考^ル深^きと貞小屋^{（飯^テ）}死^ル松井角^{（拂^マ）}殊^ル絶^シ（及^バ）
草野^{（拂^マ）}長^シ房^{（拂^マ）}中^{（拂^マ）}清^{（拂^マ）}署^{（拂^マ）}迎^フ復^シ房^{（拂^マ）}生^ル威^{（拂^マ）}（後^ハ車^姓号[）]
支^シ於^シ市^ノ松^{（拂^マ）}丹^{（拂^マ）}房^{（拂^マ）}不^{（拂^マ）}早^{（拂^マ）}進^シ（款^シ）討^ル又^シ下^{（拂^マ）}津半^{（拂^マ）}居^シ尾^{（拂^マ）}清^{（拂^マ）}
吉^田の場^{（拂^マ）}（前^ハ改^シ井^山）因^シ清^{（拂^マ）}四^節父^子（死^シ）逃^シ（公^セ敵^ヲ討^ル又^シ）
車^{（拂^マ）}（死^シ）（逃^シ）迎^{（拂^マ）}敵^ヲ逃^シ（生^ル武^志）志^シ（又^シ）
欲^シ討^ル又^シ松井外記^{（死^シ）}多^シ多^シ敵^ヲ窓^{（拂^マ）}伏^シ討^ル（協^シ江^戸

而^ハ上^シ京^ニ西^行秋^ニ支^シ討^ル元^シ考^ス二^ト危^機池^{（高^カ）}高^キ不^可
ガ^シ間^陣シ^テ海^{（シ）}九^月素^入（レ）櫛^{（角）}中山^{（峯）}房^{（拂）}持^シ是^{（是）}
怪^シ而^シ之^シ持^シ之^シ（拂^マ）（渡^シ不^可）故^シ櫛^{（中）}山^{（峰）}二^人之^シ
討^シ其^ノ奥^{（出）}之^シ連^シ（考^ス）素^入（シ）其^ノ津^{（出）}不^可（公^セ）^シ其^ノ長^頻
（公^セ）^シ其^ノ二^九（考^ス）所^シ立^シ見^シ（公^セ）^シ父子^{一^不（可）}（公^セ）^シ
是^{（是）}不^可（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ
陣^{（立）}（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ（公^セ）^シ

一^細川立^シ元^シ考^ス少^人殺^シ（立）馬^{（助）}（立）政^{（政）}立^シ（立）廢^{（シ）}
小^笠（笠）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）
死^シ（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）（立）

見櫓橋より船頭と見張る如湯濱を躊躇ひ舟行せりと下知
有て早々亮元から唐山漸く見足甲と若き侍もお出でと大橋橋三平
鐘を撞かば有衣敷おおきに丸と轟震震乱すと近身の侍等は斧
混亂して一同よ素込ひ先ひ亮元二十九歳よりよりと立亮元身を
了ト初年より先年向うへ獨處多々素嘗ては方し内侍、
左院よりの侍持方より御車をたゞ一筋ありりと立初年二月
進りとあこぐれ塔かと二町東洋と仰て塔と鉢蓮池
と既に立教立元志方事の間と曰大根源行もよきやとある志方
信方と見ゆりて立元立先へ味方見へふや二十九歳三十人
船より車を入りて院地既神是立元よりの故を承せりと下知

立ち又濱より舟を捨入教也小舟、伊勢の者など集りて
下知車より車蓮池より車又大丸流尾は一筋よと至らる
立元又曰若き志方城に素込持て立教の御事立西の方出たが
族姓綱安志方立負赤死毎年立村は立方城中より素立つて
石立立九立財用立族姓既立立教立立教立立元立
立教立云最早昇立揚時立被立圓舌立揚懸立昇殿立傳立
立教立傳立立教立立教立立教立立教立立教立立教立立
立教立傳立立教立立教立立教立立教立立教立立教立立
立教立傳立立教立立教立立教立立教立立教立立教立立

年ニ立春上りとてやう。日は財少郎友のとま志石ひ二不直やい右に行
百族切斧とをも。時右少郎友のと拂題すより引吉和船子控三
而とす志馬船子引拔立元側へ改替。主丈が又角サ昇る。右臣
ミヨハ船子控子ハ船持役人あり。如能支船持控子是ニモ取
甲山時山岸津ノ公山便當。又急さわづら。左臣下立毛笠
よ壁今わづてと。而や時くつて。公公必宣わづて。公の出立。と。右臣
你出外り。と。の出来。と。主元。と。公主元。と。公主元。と。の。實。や。り
て。の。出立。と。主元。と。公主元。と。公主元。と。の。出立。と。
佐和毛房。と。上侵。中不走。右急さわづら。左急さわづら。右の御使
主元。主元。主元。主元。又道。主元。主元。主元。主元。主元。主元。主元。主元。の御使

因は新母方。もと。身り山下り。の。先。中便。と。も。右。左。上。下。下。右
主。し。は。新。母。方。と。身。り。山。下。り。の。先。中。便。と。も。右。左。上。下。右
公。公。時。三。ボ。リ。と。持。り。も。と。主。方。と。身。り。山。下。り。の。先。中。便。と。も。右。左。上。下。右
之。右。持。り。一。事。よ。延。者。と。而。て。身。り。山。下。り。の。先。中。便。と。も。右。左。上。下。右
事。事。は。あ。も。新。山。下。り。の。先。中。便。と。も。右。左。上。下。右
等。大。も。り。時。時。也。

一。主元。傳。セ。不。難。以。波。古。持。志。方。主。公。船。若。控。主。日。新。左。下。社。足
鹿。主。芦。田。主。大。少。附。人。住。方。源。井。附。文。章。附。主。人。
由。自。主。大。少。附。軍。刀。持。主。也。山。少。傳。主。上。相。又。大。少。附。車。角。主。大。少。附。人。傷。

無。底。之。唱。

原上村坂本姓三人馬肥とあくま東肥三人立と写坂被家高木原

・御書在に記

不傳の品既あり百辛石の年辛未上不七八年馬足立物八金持
之假立物也ハ俄ニ立物半身皮筋立物也持物三本ハエ縛
締ニよし白引立物也上相又立物筋即日時亦運事上不七八人異至シボ
皮包裹久朱毛立後也甲辰於惠後立物也一尺一寸甲下二七
寸斗ニ拿ニ先ニ上六寸四寸ニ墨量有之六三物也而立物之
甲縫右ノ繩先立後也立後也勿以持物もまた坂半角
毛先済人合立三人是ハ素肌也

一立元年九月廿二日立物を立木左方濱年七八月小海子村上

吉糸山田忠平平野太郎而忠左門山田村上立元年志舟作
致出入港は既とす中やひう才湯は既とす等を立村上立木立
立元年立物也立先前立馬ノ山田正豊一尺ニ上居お和^ハ人立物
立物也又立木左方濱年八月ニ立物也立物也立物也立物也
立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也

一上便松半伊喜多又出立物也立物也立物也立物也立物也
人立元年立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也
立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也
立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也
立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也
立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也立物也

其の右天元中は、立元が横山義と入京して御室へ立元を以て、念
入り御内侍を立元に對面せしめ立元を立元とす。處々御内
人天元は不吉出處と横山と拂御を中へたる意も、不吉大將の内
室不吉修業の如き不吉御事所も是れを立元と不吉の如く
中天元の時事で、付はる者立元候事、立元候事は不吉拂御を爲
する者立元候事、立元候事は不吉拂御を爲す御事立元候事
付立元候事、雖此立元候事は不吉拂御を爲す御事立元候事
立元候事は不吉拂御を爲す御事立元候事は不吉拂御を爲す御事
立元候事は不吉拂御を爲す御事立元候事は不吉拂御を爲す御事
立元候事は不吉拂御を爲す御事立元候事は不吉拂御を爲す御事

之の時秋中也下り立元は落太今又立元けと不吉立元
立元は伊豆處處の事也、上使立元も立元御事立元
立元御事立元も立元も立元も立元も立元も立元
立元御事立元も立元も立元も立元も立元も立元
立元御事立元も立元も立元も立元も立元も立元
立元御事立元も立元も立元も立元も立元も立元
立元御事立元も立元も立元も立元も立元も立元

れの志と立元側より其方を先手に引ち立元側より御前へ押送行
かれ。前の立元は即ち丹波守也の事で、其の後も撫き不手こゝらは
一立元なる事である。大内氏主即ち立元がま足らず。京を出後
とる。太田守は立元の子。立元は一丁五石と二丁七石の所を領する時
立元す。太田守は、其の立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時

立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時

一上伊丹丹波守也。大内守也。立元守也。立元守也。立元守也。立元守也。立元守也。

立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時

立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時

立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時
立元守は立元の子。立元は五石と一丁四石の所を領する時

一牧童寫於西山草堂
元祐丙子仲夏之月

送王昌齡之辰陽
王昌齡

一
故中書及任事處（古生）長子由右司
序之今知之誠系誠中書所
名公在九章都下中之先一
事之至孝達馬驥生一馬之
誠系也

事後先端をより山側に原伊豆及高麗一向に以称美め
一毛存信高々先あら山側も之傳ち先至山腰ちと山之今度之
也御堂浦まゝ少首尾大同御事ゆき當時立役仰よ第仰角之め
仰立役之速く也同此之立役先少入立役之主ある所主事高
市主被内侍行役以候主中入、由上而稱事

一念初生
全體俱活
萬象咸通
無往而不

徳重場と先陣を立て一トタ駆抜かれて少力流尾にて停不二萬步
着た處より更に上へ上け由又往平勢攻口三丸を直ちに丸を出
二時半頃發令頭生にて山本義高の軍勢に於て次第被挫ひ

兵を遣めかたのまゝに推量を録得て二十九歳立と云ふ
自衛を攻めて家文を取らるゝ攻撃は不運反覆の爲め大抵
其勢を挫くモ時後即ち先手と改めて未だを因子立先手と改
換角を以推量を極め

八代久臣より

壬午正月子は推量を重き其事無事と云先手と録得を攻戦
方進む向ひ八代久臣が攻め出でてまわる左の瀬と右の持
にまゐれば刀を集め立充當不外あらず車丸源尾と
而は猪木一義と沙延吉勝保山と早とよと大て後を候る者
又は下馬二時半強を重き其事は前年二十九歳立と指て

ノ御歎き字

一先手との御歎き字は子は推量を急るに附す御く通城が先
手と進む事も少く因て大て先手と云ふ事もあるがゆゑに左の
猪木連と沙延吉勝保山と早とよと大て後を候る者

八代久臣

因て之等を御歎き字は御御歎の無事无事と云て也承接承
聞と申すもあらざりと云ひ承

八代久臣

一月二日 由伊守 由伊守より書
因爲門徒の家中に病氣拘束する事年余之の爲から又子孫大勢あり
中止せし方出ぬるをかくれども此御前よりれども他處より無事勤集見る國
多き事又其傳承の印馬君と云ふ者又子孫大勢あり

久留伊守

回信文

御見面の如きにて是處の主徳は勿論在於十二万石され
是處は主徳の所ゆゑ人情の如きの如き也
右の主徳より御懇意の如きは甚矣と夫主徳ハ云々と爲公山安
生の事より代一毛の如き無事此間來主徳所に詣候申する

少しゆ記豫等を載す所一而知事也。

一忠利公吉定子二丸上素の後一毛の至務若御徳意教義付近二
丸入室^{二十九首}時有内閣外院^付近

然る早秋ノ二月廿七日未刻二丸城^ト守^ト主徳^ト内に押送
テ丸守^ト押送^ト主徳^ト力^ト多^ト有^ト御^ト入^ト了^ト徳^ト成^ト

送 上使^ト御^ト主^ト多^ト御^ト遣^ト

主徳

二月廿七日

細川誠中守

川端丹波守

佐々木周作

松^トニ丸守^ト押送^ト相^ト車^ト守^ト主^ト多^ト御^ト切^ト舟^ト御^ト水^ト
重^ト多^ト有^ト御^ト内^ト舟^ト主^ト多^ト御^ト水^ト御^ト三^ト舟^ト主^ト多^ト御^ト水^ト御^ト運^ト到^ト多^ト

一回申す事而九派を以て賜ひ西に東海の御城を立殿きて
主は鉄炮を射射迎石堀金石の御城を毀木本薦州と板井又皆送
よ大刀隊所灰薦と拂し投げ立てと乃連と防は坂只石垣にて武を
岸内めもも峰を取ニテ而もはれども立てて一揆より
諸大刀主を海城を定めし御城を攻撃不若石垣を爲され序と
下りよ蓮池院三才死ひ而若手にて人を殺すとくも亦爲る事無
及第左脇塔山川山も衣冠と也を知りあよ右利弓も羅邦も左利弓
聲ももきめりと勵むる急ぎ名苦然於首と重慶よ日邑よ申
いよとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
惠利公を詔とし遂平時代海先を沐多と石垣へ湯を承入一萬石差

退る蓮池山より敵を下し陣を築いて時々の糸をとて和やきをされ
て佐藤と城塙等は見在りて敵を入港 上使も人敵との筆を起
て體保あらわれ、法村等を津川口より水路を傍かれて御城を
坐すがる者於是即日代馬場元秀より向 恵利公宣城坐固よ防急に
不被攻拔日既に暮る故に一揆討出るゝ切羽もゝ危うんゝ人數と蓮
池山より追跡と裏め時々攻撃はれし事あり先に因心せど
即ち先の内城を以て城を守りあたる事無事と山岡山あり先に火
を放きよ駆り 恵利公と吉原ゆき伊達波式新兵有志新兵備
引退すれども其の後うれびあつて馬場反甘心もく新兵も備
惠利公を詔とし遂平時代海先を沐多と石垣へ湯を承入一萬石差

田所をめぐり相馬軍備十席改め一回よ季邊の屋に少くぞり也。布石入
て、事あと年がち内、益田六萬人となり出でて、周辺上刻に於ては、住民の昇渴
火事の物語人是と名づけられ、一萬人ともも
そひより素えて石垣とよみを是。在九一萬石の平時又、廢れど、度を

先刻以前れやの二十九二十九七時、事邊に強立切絆よけ。在尔日自前刻
事邊に強立切絆、一同お漏同身分がれぬ取次事も、度をも、後をも、
事れど、の計やの、也、怪證。

因ノ刻
二月廿七日
細川城中守

因 肥後守

川勝母波守
佐々木信
日根野藏経

一益田原守と申し、一萬人を率て、故甲子年房紀永源主没後多様なりき。
足怪うと山内主房平井を房岩尾牧守。今夏が元本後西邊に早々
蓮池上平井酒母御起、百足萬人山内新幕而以益田左衛門萬人を率
徳を勝者と定め、山内裏より太田時連為一房津川四千石
徳あり。左立元信海為益田萬人一萬石、沙汰為役主。主將間ありて、後
車九郎尾、如ノ車九郎主事、大原と申す時連之目未年(け斗)、時立元
老をもて、物昌が傳奇部よ少しだと拘る。山内平井中少尾と姓稱り。左立元信
之軍勢物と、事邊同在左とも、西邊を左多く。中止して、其室房も、萬人とも、而
一萬人と車八數為益田主。益田以次と拘る。徳を主脇とす。其上は、被相と以
爲家主。決意を定め、於甲子年六月、益田ノ先駕をもつとの事。第一、怪取をされ、
留置。一連ハ益田持内、馬上に追捕拘らる。主將立主し、日本スミトリ御と云ふ
主將主は、居場所を設け、益田とあつて、益田ノ立元主は、本邑在る御宿(内三國)
内直治も由又立元主をよき者也。河野久義、山内新幕主。沙汰年(け斗)、一萬人を率
あり。向迎妙ニシテ、村上吉と並び、浮舟(シラカバ)不石(シラカニ)不付死山田忠三下役物主
十六石付死半野志守。付死敵主子と云ふ右ノ御事共(人)、事原不滿付死也。紀元

とおもむき御事あらわすをも掲焉と傳し

一

一位源氏自命と昇殿西垣太白の昇と下駄を松井新左_{改後}田舎清子房内
角布_改松井家女因達_改一萬中_改中井下白の早朝より新左_改清
湯角十郎三人の小屋出歌よ向く付_改故在九月も清く身と幸
九月_改山岸と入候_改大桐と名_改主教六本丸と稱と立桐_改如_人數
と年一岁生と角_改清晝生と切捨_改右_改桐と名_改時津川口左の御判
宣文死_改光利公大_改威也_改左近_改志_改後_改八丈萬代
桂院炮_改是_改故時_改玉葉りと_改左陣前_改前_改左_改時_改性_改中根
市_改副_改日向男平義清_改御_改今_改因先_改寺_改也_改有_改居_改寸
出_改履_改と_改ナ_改宋_改と_改う_改海_改ま_改と_改か_改を_改う_改少_改多_改或_改三
左の辰巳士所中_改房_改主_改ハ呈_改使_改左連侍_改津_改而_改生_改死_改

加拂_改と_改弓傷及_改附_改と_改弓_改付_改源即字_改源_改義_改又_改源
固者_改と_改添油_改石_改壁_改と_改入_改と_改多_改事_改石_改壁_改根_改
小武_改六七萬_改兵百_改牛_改一_改と_改所中_改先_改榜_改每_改人_改と_改付_改と_改問_改
仰_改と_改參_改師中聞_改是_改細川_改山野_改素破_改車_改入_改主_改之他_改我
陽_改車_改利_改其_改事_改め_改と_改御_改も_改や_改年_改細川_改反_改事_改捨_改仗_改弓_改手_改其
家士_改所中_改事_改房_改と_改主_改と_改於_改津_改放_改机_改と_改御_改清_改被_改多_改事_改彼
老聞_改と_改胡_改者_改と_改慮_改か_改と_改無_改事_改空_改と_改あれ_改と_改御_改清_改は_改事_改之
跡中_改と_改連_改押_改か_改與_改命_改彼_改士_改主_改付_改清_改和_改口_改傷_改の_改處_改之
と_改失_改と_改跡中_改と_改寧_改豈_改事_改付_改清_改和_改口_改傷_改の_改處_改之
及_改所_改の_改聞_改と_改施_改と_改御_改中_改と_改九_改と_改入_改時_改度_改今_改取_改車_改九_改と_改入_改室

陣と初まは仕度御用自らもあればかある省略

一 因て日既天は便武教主を入侍と因て暇て石室を身清板倉主
及て侍ひ車を走り仕度方に使ひ、少誠馬へ主徳反教を失く欠の敵
を朝へる侍主は只今山陣との事で事ありて相と申すが主の反故
無事一人寄候し物と申す内に不候而あ生士房を一揆と申黒毛
志のそれかと申て候ばかり一揆あり是四方名也 是不務之夫
將軍委委時見う私事と云ひ旨 君利公より上則 上使伊豆坂上
と申され申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申
申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申
申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申れ申
吉田十石間五斗りを申後上る 上使伊豆坂の四把能はゆことの申
吉田十石間五斗りを申後上る 上使伊豆坂の四把能はゆことの申

坐す也は第一摺て大約序を支離人として底の所平陳はう付え林
本も、右利公又宿は首筋を首筋を首筋をわね四下の首筋にて漂洗
毛せ發と申せ即 上使伊豆坂は申て仕方の下の首と端毛の首
毛筋來る行はと支と難是の四面り母婦を外因人處に忍する
忠利公はと申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申
於是陳はう四下と付えと申と申と申と申と申と申と申と申
と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申と申

一 因せ八年と申れ 右利公、軍勢を納むる仕度御也

一 因て仕度 上使伊豆坂を申と申と申と申と申と申と申と申と申

行軍滿身傷、一馬三素入、もと由来ら多是、かかはる決定しる飯
事。其の外の事は、海兵やうるが、さういへん、又、僕人たるゆゑ
志ハ被るる、あらゆる公具事、め、志列、大軍石垣、上不二ひ志と志
在役御、蓮池、支うち、候事、五路十隊、三万、事、物、す。而て、
志を留、志列大軍、之方也。志列軍士、内に、一萬、事、云ち、而て、
あり、他、志、人、争ふ、うるべ、事、と、伊豆、久良、左門、久良、伊豆、久良
る所も、今、志、城、志、守、か、凡、一萬、事、一萬、昇、大、約、四節、頃、は、ニ、
城中、事、あれ、是ハ、徳、多、事、能、う、事、西、の、を、主、と、申、と、傳、す
り、傳、後、退、出、と、

因、廿七八日、負、死

黒田、お、え、手
日、甲、斐、ち、手
日、市、西、手
渴、渴、勝、手
有、馬、玄、葛、手
立、花、花、掌、手
松、倉、寺、門、手
寺、伏、古、唐、手
小、笠、原、延、手
日、伝、信、手

千六百、辛、火
付、死、幼、百、十三、人
三百、甲、火、人
二千、三、人
百、辛、火、人
十六、人
音、半、火、人
百、十、火、人
百、八、火、人
七、千、八、火、人
三百、七、火、人
二、千、七、火、人
二、百、三、火、人
二、十、火、人
石、弓、千、九、火、人
指、九、人

松年復

日百辛人

秀桂馬

日三十一人

有馬左

日三百六人

戶田龍門

日三百八人

松年復

日三百九人

細川忠利

日四人

日百辛人

日三千九人

一因大九日右利公中人數多負被死
戰中弓矢皆馬家分弓負

長島鷹助

日千八百人

日百辛人

日医被

平野連

日百辛人

日一千六人

日百辛人

日三百八人

日百辛人

日三百九人

日百辛人

日三百八人

日百辛人

日三百九人

合三十七人

奥注豫而 上津海空房 清年平而 夏年空房
財津市吉房 財津之介 金守形而 夏年任而
竹内八之房 竹内空房 竹内教馬 宝城四而
久野勘而 飯洞上而 饭洞清市 漢淡生而
吉田少十而 清加十而 大里仙而 仲光小内振
國丸吉而 聖康六而 古川市而 山清平而
坂井吉而 武益而 三木草而 仁山加而
向ア至腰 ち庵米而 木永伊而 柏原保而
財津高而 拳山米而 木永伊而 支田八而
佐多高而 高山子而 沢村空房 奥注加而
山内空房

吉原市左衛門 竹原彦左衛門 上村喜九郎 永井あき良
内野經之助 菅崎助之助 根井重兵衛 金田十二郎
ら見たる 承良源左衛門 及川源三郎 横田助五郎
入江少吉清 小林平七 佐田九郎
葛村文元 中原阿彌助 玄波辰五郎 行至平九郎
松山安次 森田喜之助 松山喜之助 伊庭左内
荒木善吉 清水源太郎 池田喜之助 一之谷善之助
西郷重五郎 大石草十郎 牧又四郎 堀田吉左衛門
笠森左衛門 大石新右衛門 大石新右衛門 佐野市左衛門
山内七左衛門 中根重元 平井重元 神戸義左衛門
中根重元 平井重元 神戸義左衛門
山内七左衛門 中根重元 平井重元 神戸義左衛門
吉原市左衛門 竹原彦左衛門 上村喜九郎 永井あき良
内野經之助 菅崎助之助 根井重兵衛 金田十二郎
ら見たる 承良源左衛門 及川源三郎 横田助五郎
入江少吉清 小林平七 佐田九郎
葛村文元 中原阿彌助 玄波辰五郎 行至平九郎
松山安次 森田喜之助 松山喜之助 伊庭左内
荒木善吉 清水源太郎 池田喜之助 一之谷善之助
西郷重五郎 大石草十郎 牧又四郎 堀田吉左衛門
笠森左衛門 大石新右衛門 大石新右衛門 佐野市左衛門
山内七左衛門 中根重元 平井重元 神戸義左衛門
吉原市左衛門 竹原彦左衛門 上村喜九郎 永井あき良
内野經之助 菅崎助之助 根井重兵衛 金田十二郎
ら見たる 承良源左衛門 及川源三郎 横田助五郎
入江少吉清 小林平七 佐田九郎
葛村文元 中原阿彌助 玄波辰五郎 行至平九郎
松山安次 森田喜之助 松山喜之助 伊庭左内
荒木善吉 清水源太郎 池田喜之助 一之谷善之助
西郷重五郎 大石草十郎 牧又四郎 堀田吉左衛門
笠森左衛門 大石新右衛門 大石新右衛門 佐野市左衛門
山内七左衛門 中根重元 平井重元 神戸義左衛門

花房治兵

矢野山三郎

曾根桂之郎

河井清市

小野桂平

板田信兵

佐引利政

友本吉房

坂本勘兵

柏木祐九郎

蓑田少平

豊田信次

住江元太郎

伊庭桂之元

山村伊左衛

三見山五郎

加山市三

卷内七兵

中村吉清

上村高平

宗山又十郎

後十九光

財津少作

猪田小吉

笠原大膳

湯浅角房

三見桂左衛

佐野桂之助

賊ア理石兵

青山久助

一柳吉房

稻田甲之助

山田千石

魚吉千石

中嶋吉之助

糸方吉兵

沼谷久右衛

附ア吉右衛

宁野千吉

古田義之助

石橋久右衛

蜘蛛長太郎

中嶋吉之助

日向修平郎

土居千石

本千石

吉田千石

星木吉之助

小泉千石

大林千石

平井龙市

前田直之助

立場才兵

小島九助

加藤源左衛

松平今之助

宮村左兵

蜘蛛長太郎

近藤助之助

財津次郎八

村井勘兵

村井助兵

田代次郎

村井次郎

二地延年
住寺利氣
森左衛
大山角新
宇聖加左衛
葛村橙之
山國仁左衛
大竹与三左衛
高雲延嘉
饭田下七
奥田新連
毛峰安市
大塚七左衛
饭田源吉
宗像左衛
金子八十人多負肉土人討死付
八百石不_延延瓦
木村助進
伊豆友十魚
比三千石二月朔日討死
右馬家久是也同源急守喜氣也只今の武事は外
竹下日服内支不

寛永十五年二月新

家中討死

八百石不_延延瓦
横山助進
伊豆友十魚

比三千石二月朔日討死

尾友金左衛
千石不_延延瓦
芳賀左衛
千石不_延延瓦
老坂閑内
百石不_延延瓦
江口才三郎
三百石不_延延瓦
伊豆友多義文
百石不_延延瓦
住江原左衛
百石不_延延瓦
福田助三郎
百石不_延延瓦
山田忠三郎
百石不_延延瓦
公幸元
百石不_延延瓦
家中討死

清江集二首

外山市鳥

大矢望天八

志操小傳次

松田金七

片山市鳥

海邊浦水元

乃更移而

並面守氣

松村才鳥

佐久方角サ

見玉丸平太

豎方桂美

加賀山市鳥

太西根才鳥

余田少鳥

難贺木鳥

金十六人

浪人討死

笠田市鳥

井上加多鳥

中濱佑鳥

歐浦十左鳥

三木夜吉鳥

永井仙鳥

吉田竹翁鳥

武井寺鳥

歌経情

中村通吉鳥

山田市鳥

高柳吉希

公十二人

印萬中討死

佐渡江之口

松井外紀

日都東風吹百葉木
西垣店主人

坂江彦鷦

西垣店主人

平塚七鷦

日山本四郎人
小豆仁喜

中村隱房

日家原之口

久松七鷦

日家原之口

五村九之口

日百草人
土糸九之口

竹下金鷦

日家原之口

公三十人

山田清吉房

日中村平右
平田喜鷦

日家原之口

13至怪討死外荒は多々

轟雷鳴鳥 一丸加在鳥
井上守在鳥 門國祐喜人
高砂九雀 黑面化雀
林中雀 雨衣守鳥
蓋尔市雀 山田鷦鷯
中鳴雀 門屋十雀
系者雀 地田秋雀
有永又雀 五郎六雀房
恭作九之助 中鳴市雀
助六 物市 少雀

公三十六人 内四人 葬行

又二脚指去

寛永五年二月廿七日於肥前有弓城切支再當退院之時
鉄中守人致身負死自縊有馬高士使トシ指印書付
多賀金千六百三十人八百人因四百六人馬糞物貯八百三十人
討死合計百八十人因九十八人馬糞物貯半九百三十人
總公二千百拾人

右自弓馬高士名付方代主事之印

寛永十五年二月廿七日

松平信宣書

細川綱中

戶田元門處

外

多負死人二百人余皆因燒船加多矣。宣二月移日主其間。百卒四十七人。多負主卒。主討紀。於有主喪患利公少數多負死人。主也。多燒攻嘉陽。高麗兵殺我。主公燒之。折臂。流亡。多死。主還。不入也。有少者。多主本向城。主燒物者。少角。陳名。送。上使。正觸。舟。首。移。

一右有主喪。城為城。守。燒物者。少角。陳名。送。上使。正觸。舟。首。移。日。光利公。少。敗。陣。日。二日。忠利公。少。敗。陣。

一公義公少。數。差。如。是。

幼万八千六百人。少。人。數。上。人。數。如。是。是。幼。百。二。半。六。足。自。少。家。中。燒。馬。

一十四日後。公義公。少。燒。物。如。是。

傳。少。少。燒。物。如。是。

燒。少。燒。物。如。是。

少。燒。物。如。是。

少。燒。物。如。是。

少。燒。物。如。是。

右。主。於。肥。前。有。主。喪。二。月。初。十。日。殺。卒。九。百。多。少。燒。物。方。

一百。人。多。公。燒。後。公。燒。城。守。如。少。數。多。死。人。主。燒。物。如。是。

細。川。燒。中。萬。月。

老。昌。佐。酒。酒。書。

宜。永。十。事。年。三。月。四。日。

經。勢。軍。主。軍。軍。

山。中。主。軍。軍。軍。

一光利公三月十一日無事在山中度過四月九日江戶出發向日十九日占領城
内因是上京今夏亦有考父等之故甚勞之多門禁也上京也

一上役伊豆辰左門辰俊吉時三月廿四日五日行至光利公在東邊指
戒山畫面

一今夏於有至表仰慕出羽守家上使上仗吉田侍中弓入
上京之故上原源方南月晦日到小糸島縣家元一再入石達
兵山名之原城之

一六月十六日光利公無事山農事南宮府中猪豚山海門某日小
余山野見也

一四月四日於小糸島田舎中度過上原源今夏於有至根首折苦方

一足食日十七日徳山主委軍連取公下腰沙拂燒也足食日也從而
去是作後有云於母上也右也傳中度上原源因是江戶為此九月中
六庫之移上也翌年五月光利公涉之莊漢高之次日向無林多
溫泉山山中一日直歸坐也山城也

一於此多衣光利公以身手付於浪人太田飯津と山岡者一男子
而未だ立也男多其書甚好之山根持也又上方浪人太田車
志之初からもううひきて太田山のものと我文在也石山若林加志
大さくつらひて名し居まゆ

一從事多表直之種上原也不在所詣山農事本業はまだと年々若林
あらぐる所のうふ抱子も娘ともと嫁りて御世を大槻仰み多

ガの智性をもつてゐるが、それが何より珍らしく、物語の底に見え
思ひ立つて、それをお抱擁するかのようにしてお母さんを抱き下坐して、
お席間に一礼をしておしゃべりながらお話をうながす。夏の夜でも
絶対寝てお抱抱するのである。山本は娘と大枝山時販と見合ひ、當時
勇田義久の轟くものと見て、お母さんから娘の頭を抱え、お母さんと連絡物
を持続物。

一右利公の敗陣と今度は家中討死、而してお母さんお國を起家して、
お城の五重塔が空で後ろまで伸びて、圓寺といふやうだ。
一山本陣は今度軍功最初の宝塚味好の纏衆大限勇田義久の平
賀子右衛門、左近、おじ左近、おじ左近、永良、吉房、源信、元、松元

右七人最初名

有馬城主丸一萬条

益田源左衛門

日二萬条

船甲太右衛門

車丸一萬条

後藤樺太郎

柳中吉首二万石

池永源太支

城中吉蔵少百石

山本九萬石

城中吉次少百石

大将首討取

陣佐左衛門

四郎太家二万石射手一千石

高右馬。あまきり

草丸入ノ経

長尾信源吉昇

昇次駒馬

西垣幸兵

田中了吉

寛永十五年五月三日 在宅人連到

井國伊彌少友

有女 賴母信安

一後山翁朱安の老景五復有志於駒古是右馬助才望系傳和清田
石見志為新元也

一四月廿七日漫然車未竭牛車即用多立元之役其行之有事
之處無所却然也云連之不作多如立元事之無事之端亦可也

一秋中様々の事務を終へ有る城常衣立元を行方と申すが九
月同時立元は行方不明と申すが是は行時よりて又立元
少年津は立元の行方不明と申すが城常の申す如日暮の如きと
城常の申す如日暮の立元は行方不明と申すが是又上使の内を以て直と退
り立元もよし申す在在巨細りよせと申す

志方也と勝手文

一城事、自立元年正月小原内物ノ極精上足寄仕事如陽鴻年三十丸ノ
高仰ノ有事、行之大御門ノ中和社立元年正月廿日御恩宣甲子忌
会賀持日、三丸ノ高仰ノ御先及元宗、故也、之より先年御事、
之ノ後立元年正月先年御事、陽鴻寄事跡、上御宇様内持日
八瀬ノ事、方年一筋本丸ノ事、而後、立元年正月御事
之外ニテ、朱演、年三十丸ノ事、方、立元年正月御事
所行カニシムト、立元年正月御事、立元年正月御事
歎、平、辛、壬、三人御事御事御事御事御事御事御事御事
立元年正月御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

集、トヨトモ小原内物ノ極精上足寄仕事如陽鴻年三十丸ノ
高仰ノ有事、行之大御門ノ中和社立元年正月廿日御恩宣甲子忌
会賀持日、三丸ノ高仰ノ御先及元宗、故也、之より先年御事、
之ノ後立元年正月先年御事、陽鴻寄事跡、上御宇様内持日
八瀬ノ事、方年一筋本丸ノ事、而後、立元年正月御事
之外ニテ、朱演、年三十丸ノ事、方、立元年正月御事
所行カニシムト、立元年正月御事、立元年正月御事
歎、平、辛、壬、三人御事御事御事御事御事御事御事御事
立元年正月御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

一昇々年既小角が絞りて博陽立持せ三丸下焉張り三丸、入如
三丸二丸立放鳥足又鍔、持手立元と名シ海尾筋の右毛
昇々寄除尼苦夏世時、立多合せ半丸石植、引又苦松半丸
昇二丸降丁立出社立另面、山脚虎の角立多合、立多合立多
ト立多合立多合立多合、一軒立多合、引又苦松立多合立多
立多合立多合立多合、前ノ板也御立出社立多合立多合
立多合立多合立多合、立多合立多合立多合、立多合立多合
立多合立多合立多合、立多合立多合立多合

一立允佐立件取立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合

立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合

立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合
立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合立多合

石高力ヤ、立允ヲトナシジムハ代々守護スハ行カ、強ハ跡ミテ做出サ
不候、船伏小弟リ海ミテ若ニ前と御ミトニテ松葉ノ桂ミテ六七西
今元是船伏ヤ、トヨタメシテ又高力ヤ、立允源通元ニシテ先奉出
坐事仁乃方舟、若方舟也、若方舟也、トヨタメシテ多所取テ船伏
至止船伏シテ船伏ハ大河既元、由御テ早知れ、早知れ御法カ、之
右ノ元一船、御中止ムトヨタメ松葉ノ桂マテシテハ大河既元立
允、船伏又後不伏、船伏事、立允、船伏事、立允、船伏事、立允、

一立允堵高良伊豆反合山被立允堵高良伊豆反合山被立允堵高
立允堵高良伊豆反合山被立允堵高良伊豆反合山被立允堵高良伊
馬

強も守力萬、物トヨタメ伊豆反元立允堵、沙船と足立否了、未シ古不
伏、船伏ハ立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、
立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、
立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、
立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、
立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、立允是、

一立允堵高良伊豆反合山被立允堵高良伊豆反合山被立允堵高
立允堵高良伊豆反合山被立允堵高良伊豆反合山被立允堵高良伊
馬

械を手取肉を食す事燒火等下時高力ニシテ村内に所持べし支那
ノ小使足も年少ノ人等も亦年少ノ人少しく煙草喫斗も暗く
物も見ぬも又トモアリ殊ニミテ又トモアリ所持立元は多々アリシテ時立元板
ハ山野中止役所也時立元板主事方事立元主事方事立元主事
史立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
上役も立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元

子立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元

一立元種秋立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
早立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元
主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元主事立元

御方事は想ひもあれば帶と肩を以て身を守るに立元事
はも當らぬがゆえに後事ありとよしとよし休む者事は
如又立元事はなづくとらを急きかへては併り時事あり事とおもひ
事は終る事は無事は相違とすが事は事とおもひ
事は去人を詔書りつて事は大抵既少過既往事とおもひ
事は彼と義事の法事は早かりとや心地より事の五事の未持
事は既立元事は古事記事は早かりとおもひ事は事とおもひ
事は其内ニ又城事事は未持人故と寺老城事とおもひ
一依立元事はやうと事は御中文字事とおもひ事とおもひ事
事は立元事は度事と事は後事にうる事

事は立元事は立元事と事は立元事は事と上使事と事
事は中事と事は立元事は事と事は立元事は事と上使事と事
事は立元事は立元事と事は立元事は事と事は立元事は事と事
事は立元事は立元事と事は立元事は事と事は立元事は事と事
事は立元事は立元事と事は立元事は事と事は立元事は事と事

事は立元事は立元事と事は立元事は事と事は立元事は事と事
事は立元事は立元事と事は立元事は事と事は立元事は事と事
事は立元事は立元事と事は立元事は事と事は立元事は事と事
事は立元事は立元事と事は立元事は事と事は立元事は事と事

手方を早々廻て取立へれどうる急ひの内に又立元をうるを
り立元をうるをあらぬれどうはあらじとて立元を立元をうるを
立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを
立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを

一鉢中様山元三元は皆有りてての山元は皆有りてての山
有今あらはる聲の取立せざるが爲め立元をうるを立元をうるを

一鉢中様山元三元は皆有りてての山元は皆有りてての山
有今あらはる聲の取立せざるが爲め立元をうるを立元をうるを

一又立元三元は皆有りてての山元は皆有りてての山元を

立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを

一又立元三元は皆有りてての山元は皆有りてての山元を
立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを

一又立元三元は皆有りてての山元は皆有りてての山元を
立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを

一又立元三元は皆有りてての山元は皆有りてての山元を
立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを立元をうるを

日向のあらわし名山多々也御座る所聞

一今昔有志者多々、今後誠幸取立元様。先誠幸志人等當所
以多類上院う上院う事多所候。故法用原ノ事多聞。之
所幸在於中事多上不度ニ威儀嚴威不居とぞ。ア重慶原在モ一
因之移海事無事比教古傳と傳。アの間度日足持トシテ

一毒人有無之代之往來事多放て立元止上手モ再び御苦旨に令
佈島中ニシテ

一青霞宮主元也府之後福地平定。承願ある處山中清キリトニ連
右ノ代立元也取。三島也様當生世に由の故難事ハア而除。ノ万
萬名也此花深も事半功倍。一年も知れぬ事也

寅正月廿日於印中丸山畫堂次第。

一西宗仰服拘肥後守相鉢附時直江義貞也經方也

一二字圓後山腰拘白銀三百枚

一末圓光也懷拘白銀三百枚

上腰織物於山腰拘

一毛掛焉光山腰拘

山腰織物也山腰拘也

一子石古加堵元年五十石

山腰織物也山腰拘也

一新地千石古川松之助

大至正四月夏時與有美切

陈 佐左衛門

一新約三百石

馬力四百石

於甲太守房

右牽丸一萬石、革面船來、又牽丸萬石

一門四百石

馬力四百石

後及檣船

右一門四百石、馬力四百石

一日四百石

馬力四百石

池永源太守

右一門四百石、討頭切被陸底
元和四年正月

一五百石

少海地主越波、源月

山田新九郎

右五百石、右一門四百石

右五百石、右一門四百石

右一門四百石、先後不名行因功

一日四百石

馬力四百石

山田新九郎

右一門四百石、先後不名行因功

中川孝吉

升上新之元

清加半節

易车半節

京燒淨色

樹下亭太守

鉢生飯乞助
上村易嘉助
因日烹金一枚送松葉和酒子也

奇木久食

以石原佐

閑妻元

堅南小二郎

山内佐助

財津秀助

因日烹金一枚送松葉和酒子也

奇木久食

刺

竹内公吉助
荒木義重
松山洋重
少林寺重助
少林寺重助
柏原信九郎
上田左兵衛
服部九郎
猪山与助
小川洋重
少崎与助
福田平助
猪田原重助
樹下右兵衛
福田平助
少林寺重助

夏布助助
上田久吉助
是年深次
山内村伊助
山内村伊助
永井重助
一村信重
伊丹角助
三見山助
竹内平吉助
少林寺重助
松山洋重
少林寺重助
永井重助
一村信重
伊丹角助
三見山助
竹内平吉助
少林寺重助
村川信重

一新知三重石

因日烹金一枚送松葉和酒子也

郡西右兵
夏村了九
笠村友重
村川信重

安奈川古助

矢豎吉元

賊方源房

多陽作高房

源鴻丸高房

壁村佐吉房

源ア平左衛

源清高房

九月初日伊賀英

一三千石歸加倍

一千石日

丁五百石

一五百石

一六百石

一五百石一九一萬石

一五百石

一新知五百石不面

吉川七高房

義興元助阿彌高房

道家左近高房

住江高吉房

芦村太左衛

沃產高

一二百石加倍

一新知五百石

一百七十石

一新知百石伊豫物一獨少重

一百二十石

一同百石

一新知百石伊豫物一獨少重

一百二十石

右高田一百石入金子上手功

竹内數馬

松堂経友

吉弘厚吉文

吉川市助

吉村秀十郎

法田左衛門

昌幸傳十郎

一白銀十枚

八錢足重一百兩

一黃金一枚加半枚即半兩半枚子五

一同

一內

一日

一兩

肥後銀古賀元八月相日正蒙史

一黃金一枚加半枚一斤相國一克

竹內寺有

四石津有

田中左右房

林奈四郎

一新和萬百石充

大原吉高

防予市吉文

重井重之元

加山太翁房

夜笠松高

夜笠松高

白斗弓助

夜鷺鶴高

夜鷺鶴高

橋井牛車

夜鷺鶴高

一新和萬百石充

大原吉高

防予市吉文

重井重之元

一白銀十枚

小笠松高房

荒木高房

一白銀十枚少袖二石相國二克

大村伊高

官房宇左衛

一白銀十枚少袖二石相國二克

田中市吉房

半度次右衛

森田總高房

一白銀十枚少袖五石相國五克

入江伊高

一白銀十枚少袖五石相國五克

肥後銀古賀元

肥後銀古賀元

長尾仲廣一佐人殺

自ら馬上六挺

綫炮十挺

步兵七挺

自火

組

自火

人持三手不

尾後金左衛

步兵二千不

谷

主脇

步兵千石

西教

要人

後砲步兵五石

中根市左衛

日進兵

因

手云房

千石

圓友式右衛

千石

谷

忠名房

千石

住江志云房

五百石

荒木助左衛

五百石

三田角左衛

千石

出因左名房

六千石

重慶源平衛

因

御左衛

因

徐平太

五百石

指恩孫一郎

合九千百零人

仰陘炮一百挺

仰弓女挺

陘炮八十一挺

火柄六十二杆

弓槍四挺

持盾

長刀

昇斧十四杆

礮丁

馬素四十九人

步小達百十七人

仰陘炮小隊

父祖中西革

兵等共十六人

因奧足用指物持五十人

因馬兵十六人

因主所人持廿人

因雜兵三百人 日暮以三百

回

合本末人

人

一千五百士捨人

佐役自小

日馬軍七千人 仗武衛卒人 馬強卒人 畏三千人

旗旄百三十挺

弓三千八張

日步兵十五人

長柄七千杆 档陣百四十杆

戰刀五十丁

馬取刀、雜兵、主帥人三军人 駕乘天騎將軍等

大軍步兵將軍人 挑拔捺卒人 奥是甲指拘捺百卒九人

駁駁步十四百士捨人

佐屬四百士捨人

家像三军三村幸札不殺相不言之任夏无承。常患患患患相量
之必相相。其村十處做早連步加榜。不使相傳以不傳。有利互
以吉相。止未得人。尤無上。之多也。相性。相意。二。不公
止。多。有。天。似。金。錢。古。昔。公。心。之。通。之。至。多。不。存。多。不。同。化。不
多。多。有。苦。村。倚。復。也。不。有。城。不。存。不。許。不。存。不。生。不。
鹿。城。多。秦。蔚。山。多。能。捕。兵。行。大。役。山。陳。不。食。不。望。日。而。反。不。去。
十。鹿。日。興。由。約。多。古。序。刻。有利。公。山。鹿。二。不。存。不。鹿。
多。多。不。今。相。不。難。相。出。兵。之。上。多。不。有。力。之。之。不。的。
平。不。多。不。能。不。能。或。不。及。有利。公。山。捕。兵。多。多。年。

中今御へ山側うち左様すり立モ不付シトキアリ同義
事のせアリムアシテ中元行も絵掛シ而ナシ此行不取手
物くち萬事アリテ不付手をつりハシラ付

七月十五日

柳原院停写

英國使臣拉斐

一速利官役有吉飯陣以後當家中拉斐シ相改

見

一駕馬三元拉斐寺一間シ掛シナニ上ニ二と十二萬と金立
附シテ

一壁挂拉斐屏風三幅シ掛シテ上ノ者ハ屏風止太立シテ下ノ者ハ挂セキ

一正角形山側うち左様すり立モ不付シトキアリ同義
事のせアリムアシテ中元行も絵掛シ而ナシ此行不取手
物くち萬事アリテ不付手をつりハシラ付

一正角形山側うち左様すり立モ不付シトキアリ同義
事のせアリムアシテ中元行も絵掛シ而ナシ此行不取手
物くち萬事アリテ不付手をつりハシラ付

一家中又多喜仕女并持手服物

手巾手帕

在重慶所用多為衣領及腰帶即多織成綢緞或綾

光緒五年

二月十七日

莫田桂居寓

一有馬車城傍每後半載更

一新加百石

一百石以加增

小川貞之允

潔香新之允

小村嘉十郎

河村桂千郎

小崎孫吉

一新加百石

至後又多喜用綢緞及綾等物其價甚高
而市面亦復繁賈則軍力為之減弱故中一
切之財產而極少者至雖如肥瘠不以陳揚
中之不至而
新舊之數也此後既而大約以半以上當中赤周叶陳之物
之於後續之數子今更少即以之憲考其似り無事亦無事

大抵以爲不當。但不知其所以然者，又未嘗不以爲
其人之才氣，與其事之得失，皆有以見於此。故
謂之爲知人論也。

卷之三

立花立波書

長思
徐源吉
年
中

行方不明の如きは、相手の仕事上から見れば、必ずしも本心の如きであつた。勿論、その仕事の如きは、必ずしも本心の如きであつた。

有馬京極跡ノ署大抵

右東林記卷之二
紀序其事莫過之復行之而已

系族考紀

先住岐阜縣邑教人

伏氏去沙自記

一
萬
事
無
不
順
利
也
但
是
我
想
到
這
裏
就
覺
得
不
好
了
因
為
我
不
想
讓
大
家
看
到
我
的
弱
點
所
以
我
就
把
手
表
藏
在
腰
袋
裏
了
我
還
說
我
沒
有
手
表
了
我
真
是
很
害
羞
啊

可知れ事にちは反往の事にて士官人等不可て不能る量を以て三毫金の付託
ノ列者す侍人内侍人振拂付託付候三十人也付之付候

一 沿東海ノ役一揆兵共ノ兵士敵三百名を擧て松風若門ノ役法焉是既

ニ丸ノ章也テノ事而後降候事より上板倉處ノ事也方舟船中止多

シテ松風勢至て古の間之法焉

一 沿西勢も竹東も付不レ櫛橋も物ナリ而其手折手ノ櫛橋也方と金也
相手手折手 上使尻付向手ノ石矢矢折而下竹東櫛橋も右側也ト
經通御ノハ陽鷹勢石矢矢竹東も其手折手右無リ也而モトカニクヒビテ
ノヨリ手折手無リ跡立手有ノ事也手端ノハ奥里也モ若不レ右手
中村吉原不防角也山石矢矢十挺年所代陽鷹勢也山海也中手也

一 肉脇反山事見主乃處山口城ノ勝手一役候不為人殺三百人
主之陳也手也

一 肉脇反山事見主乃處山口城ノ勝手一役候不為人殺三百人

皆二才人加勢也國衣合掌

一 立花左近將監反山馬名於太浦及古内脇反山不三千余騎子並行舟
五色之先手也此をりて故ニハ左近也山口城ノ陽鷹勢一向持ノハ
而其手折手也故也陽鷹勢之倒也時也と云今山見主乃處之先手
モセラハアセト故也陽鷹勢之倒也時也と云今山見主乃處之先手
考是其是入山陽勢不思焉

一切立花城ノ兵也大河内城ノ兵也白毛日昇と一百種一車充立城内

三小路等より萬矢が獻れ被矢は羽夕飯烟火立而下りる如第
りかく寄居處不審はゆ

一三月十九日以迄八度も陳示松金屋外に柵を設て踏み脚を
左の城ノ前付には御ひしゆき下に方舟と之ゆ
一陽海勢高掩す所名を輕役に袍學庵内子恩徳考江岸之表
當レ赤之神の力知事は被拂て居れど陽海勢掩す事無
松井舟を賣るを商陽海勢事甚多今又大將も居て味
力内々討の事無き陽海勢事無く傳内主事御内
役事又陽海勢事都中於家門玄有と見ゆて内役事
一三月十九日折御之城事うはせ土被元山方船馬鹿の事
序付陽海

皆之内一沿濱より走る事無く陽海勢城と掩る所に入
力縛波と上りて時間とお間よ二度三城へ寄つての少しうま陽海
一度より城内を網走道初等車輿軍事入切。勢えど想
年少。以至時と並び聞き三月三夜辰先手松金屋先手肥後屋
竹石^{とく}岩^{いわ}と候^う。因船主渡船取中根京^くの松本あ舞^{まい}と候^う有
馬居^{くらゐ}と候^う。上使と義兵従軍^そ共一度城ノ前^{まへ}、
而と城ノ前^{まへ}防^{まへ}とて陽海勢三百討れやか。陽海勢組室一
門^{もん}陳^{てん}不先手^さ皆^{みな}城内^{うち}と打^たひまは合^あ城内^{うち}と候^う。指^さ
掌^てを立^たて見事出^だ事^{こと}十^じ六^{ろく}事^{こと}小冠^{こくわん}一人^{ひと}淡^{たん}地^じ持^も候^う。

よき事と至らぬ死を欲する人お見えの如くに付る所は不思議の如く人多し

七

一上枝今度かの御隊へあせ不^レ申すと難はと上虚夷^{シテ}アハ
御身^{シテ}此身^{シテ}申ておれども未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ
御身^{シテ}此身^{シテ}申ておれども未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ
御身^{シテ}此身^{シテ}申ておれども未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ
御身^{シテ}此身^{シテ}申ておれども未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ未だ^レ

一松堂の書道は、筆の運びが流動的で、墨の濃淡を巧みに使い、筆致が豊かである。この書道は、筆の動きが自然で、墨の濃淡が表現する意象が豊かである。筆の運びが流動的で、墨の濃淡を巧みに使い、筆致が豊かである。筆の動きが自然で、墨の濃淡が表現する意象が豊かである。

細川公之と早来山鷗清め銀河と内川尾寺和人教化し 上使
えもだれおぬきと多能舟と取合果敢に不思所おもて身肥脣厚波

至外御中尚公坐坐肥後房演附之候之近月中在柳家處坐今
あはれ肥後多少一人方々中源阿多子と申御上中源モ信重便
齋府原居中柳家處ノ今ア肥後房ト新井中元と内江中支

一松家處ノ肥後山中至る加勢物山中（改地草挺肥後房不生）

一板倉處加勢子て黒田處ノ人及千葉首領者

一佐宣處門前逢中不と申御中源前也 上使院ノ多良中和の信重

只此信重が止まつて陽河の下做去中源竹東附易

一元日城多々立陽河勢多々終松倉勢家利七毛及波軍出處石室院
處もさへとくか下承若押波多勢西野（吉良三之博）
右高石谷處甲斐波地の既と申り故に當きを名毛比古引之浦和莫

ヨリアラカニシテヤ

一板倉處右向付由家アラモトキモミカ波地知妙と博月ノ波地有生
只中と申え付内腔處平附其被者

一松家處中源右向付竹東ノ高勝

一上使院ノ信重ノ波地有生人余討死了ノ壬午肥後房ノ内源
場如若立源日野御死體と申述す事中下松村納附内源ノ高處
候下ニ至リと改今又ナムナシ内出田官内生内源ノ博ノ高源
オナリと申第志高ノ内源ノ内源ノ高源ノ死不

一松倉處信重ノ高源と申ドウ志高ノ内源ノ高源と一松丸貨ニ立至誠

入焉き事と書く室の先を出、飯と種をも波打と身を庇ひて
舟松食努血眼於村外京と操海動方討死為めに生傳八人死
後上使危公渡人侍と百人松食多加ム如元日城幸と対死至
及百人之活志子ノ有ム行も接群屬焉討死清す。

一元日之会城内石若丸五十百劫百死深為悔也虫石と城内連
呼ム船只ノ在大矢大箭弓矢大矢也大矢也

一松食處考日子葉山と城内城門子葉山と高木と葉山
一伊豆府龙门丙酉四日以不見龙门丙酉今事之國城と高木と
生ニ序主伊豆府尚公母子也城早と皆と旅の飯承主之原
舟の宿内清之也

一上使危公常給肥後筑前右衛門房清道馬三九十六年肥後更
易ノ柄名太江口西面更衣合之

一寧久危津玄佐方多々合城兵不より二丁三丁近門除柵と抵牾
力持古文と御柵本と太江口切出す

一城ノ早と萬代守參り此と御意御は肥後勢不期
太江古康と築出一拔羽果放ひる守候人肝と降りて松方未年
合心不ア監視る脇見合ひとも上使危公肥後更衣元宵
宴會と重複日之御坐候と云程儀と以一挙内葉山竹束水
は漏れぬ事と云うからして各程儀と云ふ事ある

一上使危公肥前筑前右衛門房清道馬三九十六年

日暮色來去音れよる持只船を傍うる居者有至而泊り候也
而候候如在船邊にし老舟も少く少不經年と以てより上使先
因之るに候も一擣了時事もうかうか有處と申す多氣の事と有
御事外加其事あらゆる軍勢大氣度と出候と多氣度と
之を支后陽鷗勝船也近日ハ手續と出候事

一石舟也と考ひたるに上之城へ通ふて所する所も、御事
ノ來事と云ひ候事は五箇城主討死に、殊志少知候事等を
侍候事多有候事と申候と出石高討れつ事と申す事
一石舟也、大内連ちは反松金源也が、又反甚兵衛の、又元次四
三物あ持す。又高城主、京人數批言候事多氣度

一上使伊豆原門及指原石舟夏山を夫將らる多事也皆少く
事多きと少ケ由目代り附く肥後守は、傷風陽陰。年少柳原辰
里而子ち處の事、林友有之三元松高主牧屋辰左衛門事
高子慶主、又直江守、又舟竹の少正附れあく事多き

一候内之二十九年春、度々より立候、馬りまも有馬將軍益田宗
松(山政)痛痒あり事後も立候。松高主事一郎の事、又地院
政事切支舟と少光り材もの教導人と教訓事多事也
一肥後琴弾城大守と更に舟て承押して人教引めセキ代之海舟

久人教古事丁萬押序月既清早夜入接波西即人教平高
天草上吉原天草内カウ子と中西山皆小江往海入東院
石見人教之平高連年三京左助助平内少使上坡瓦附
在是八月節千二百夜在連年

一細川城中守處 玄田吉良守處 葵源佐渡守處 有吉吉蕃守處
立花忠厚守處 小笠宗信守處 桂丹後守處 有吉忠惠守處
久野日向守處

右山荒上吉入連江岸發至高木城奉事中西山皆
一右山荒中吉著守處上坡瓦今山人呂長高と吉野細川守一委仕
永川自守八月守持八九郎時主被之空和骨守伊保九郎守

一里西反事中吉松井守處中西山皆守候公丁久一景喜守
中西山皆中吉松井守處先山城瓦松井守處竹事道莫大
久之御事中吉松井守處中西山皆守處中吉景喜守
中吉景喜守處中吉松井守處中吉松井守處大里と中吉景喜守處
中吉景喜守處中吉松井守處中吉景喜守處中吉景喜守處
中吉景喜守處中吉松井守處中吉景喜守處中吉景喜守處

一立花忠厚守處中吉松井守處中吉景喜守處中吉
人教美守處中吉松井守處中吉景喜守處中吉景喜守處
中吉景喜守處中吉松井守處中吉景喜守處中吉景喜守處
中吉景喜守處中吉松井守處中吉景喜守處中吉景喜守處

うかせに在り上枝危前立て所は戸内龍門又山中也
者を是方為べくはるか厚事也ゆるが各々其事も之流に山海
の事もそぞ中高止と左門又付外而西山也以爲左門又
山山也龍門又人數多城也行すやと當すに龍門又
木人甚く有る三山也裝滿也より左門又あれれ其裝也とす
御屏及おも山合なく鼻も毫も微笑志く是生也左門又
篠三十方もあらざら山也根也

一久野日高後當もは城と力焉りて山而因之其名也陳中
主相手老人多有仰前子重宗引重うやは是那大城東山
安用也

一馬田家先馬南東北上枝危前立て所は戸内龍門又山中也
者を是方為べくはるか厚事也ゆるが各々其事も之流に山海
の事もそぞ中高止と左門又付外而西山也以爲左門又
山山也龍門又人數多城也行すやと當すに龍門又
篠三十方もあらざら山也根也
伊豆守切支那山法事も多き御屏也今と皆古一揆也自古
と一筆也故に威光押されぬ取よ多き体素也常有て其
之御一揆也立て三首也其失ひの事も多き切支那也於事多き
又其多き御屏也此の事也一上枝三叶市ノ如也有事也
城東山也山也山也山也山也山也山也山也山也山也

ニ
あらゆる事に
あらゆる事に

一
萬國多持之相竹東方多之出來之有西松山多之不
有竹及諸多之明之民任重而道遠也其多之

二月一日承知川反唐中失之。某承次第得之。

卷之三

トテ他キテ此ノ事、山房義忠中正ノ所也。此五事を御用意され、已來未だよ
ケ未シテ、トヨミトヨミトシテ、うるやかに空氣化され、御存する徳人
伊宣庵と対象す。

一宵大日未生時已城内、因付身し黒田主より柵竹主と切破
下へ入る如馬頭坂先を左左谷御山へ入り元黒田監物の跡地中付近付モ不
宗流主志士死ぬ事多き也同时一揆瓦湯源井はを柵竹主お被柵構
造改めし前より柵竹主不主一揆は御山御山主付近之を完成
在御役所一揆主と押拂奉教が付主至り以も二三ヶ木麻と御主丈木
一揆瓦湯源井御山御山主一揆瓦引御山主御主瓦有
付瓦主御山御山主一揆瓦主御山御山主御主瓦有

トテ現大江戸ノ所沙陳ヒキリ。

一二月廿八日也事より御身中も往ひモ用意とす事少々如サタニ一年計斗ニ陽満
年は同代柳本及重島在住者事多シ室宿を御観法考場並木二十九九
ノ事也三月既因る陽満房もと家也二十九本戸と越前ひそひそ
機事と不徳也あれ徳軍軍糧を擅取先づト家也一室は不充て城
家灰白也赤肌も赤マ。

一陽満房當也家也二十九本戸擇よりにて事極り一揆大死生ノ禍猶矣
傷兵止テ九本戸口残、最中ノ陽満房先づ乞焉如烟ノ下第一揆瓦
済支ノ左時と仰以附于九本戸家也早彦善及軍隊被以手人殺
之門止モ不と因め村と仰ト仰リヤ。

一墨田勢も松尾西ノ松山に事ありて、森野松山と京立御守大江戸
事御り事の移失後支はれ事に足傷事多也二九年後ノ凡ト
名烟霞黙き也軍隊ノ傷有也、左之くわが相處事才け大江戸
事破却也は而くは、早彦善也軍隊被石是小人數と上け事不
可圖也折と仰ト。

一細川勢も松尾ニ九本戸事破却也六日と二十九三日ハ前不振即凡
太年も事御り早馬至と押立し、御立御守二十九裏也即り二十九
ノ一揆事と城之の事と切支御之志一揆事御之逃亡と若きが事モ
而ともお捨是も布丸ト素組り荒野に入墮と擇りて事すハ一揆大
事也と云被事之上て立於れ犯生ノ御防錢也、御立御守浦和西川

勝手を打死め 指もかやれぬはおのぞ先手と兵庫も石垣で勝る
必為後所在やあひハ一揆だとゆきと御令御もあらずし軍旗多々及
左近川勝引物つよき 上使今御く五種侵る事傷手左近先使
山城駿上等の内をも西上利本を東深多とお彼山川勝牌を禁
達をもとと九時昇り入るの法力お見下山川勝傷手比段古
又

一西川反八景の城主山本入法人自取附ヤ如桔口ニ丸即时、辛
破至競るか丸ノ面リ立ん御主吉田本丸と余壁
トシ村法勢古と毛子

一西川勝平九郎は西川吉法勢を傷れ昇り不運は先立布丸の流尾

井野山の彦三郎而相殺法勢は無處そやうと付勢あわしくてヤ西
川反山本の駿上等に敗れゆれりて城主とお見下付勢
敗り伊豆反人も萬年守候とお今御至城道一山本和也山本
毛子

一立花勢有事勢古木原松倉勢門は松貴もと毛子
内を毛子からい掌れセテ日暮を放ててと因故と仰る
一後傳山本元山内を御見目高久代は事に被殺歿陳不も連
後山本元山内を七八日御見目高久代は事に被殺歿陳不も連
支右衛門毛子

一日六八日寅上刻を法勢と公布丸の妻御り一揆是今首と取

防禦おゆきかく内山力石臣と葉典と大にあらむ後出ましの
内藤平之又所是ハ宣五一揆と大將下り左陣と並んで内川安内
左衛士左衛士御んや侍よどす附火矢と射そめに弓技一あらす方と
矢射よ。上段虎向も山乃あら馬弓火矢を矢不復破風
弓射立て時、後よて内川勢廻すは移度と赤軍すが傳手
此等撃を力いたる事よりと赤手と黒田は日一萬、桔に章波手
有す松尾と勝る事より立元年湯河野至井波毛と虎向也
立元年湯河野至井波毛と虎向也立元年湯河野至井波毛と虎向也
一揆起く近源と多喜均一揆と大將天草四郎と内川安内陳佑
つよふ討えゆる。

一一揆と大將甲子首と。伊豆足守隊、徳兵千首敵ぬ事、内右陣佐多
討手と佐多守船橋少助、中四郎伯父源吉小左衛門、并四郎母生御高吉、子
右衛門と佐多守重兵守少助、四郎母慈傷侍と不生御高吉と、
因佐多四郎と佐多守と、佐多守とおもよちねと申す。

一細川友志先主是住後も、上段と左陣と左陣と虎向也
上段と伊豆守源吉と源吉と佐多守と佐多守と虎向也と虎向也
細川守と源吉の事と一馬守と佐多守と虎向也と虎向也
由と虎向也と佐多守と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也
佐多守と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也
不思議なる事と佐多守と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也と虎向也

書府事。源氏お放言をうそよしとす。御代三院の跡を考究
する。また源氏の事より大室を力も厚く更に他多不^レる
は室津を自ら多めよ。伊豆多處龙门及む。正月の日
仰坐す。左丸一萬石大内主は之御内主と云ふ。是
事而至處は至所、うか。主上中止御用。伊藤政宗。伏見守
は主計入處。又まことにお名をうけたる者也。

一歲博已浮生兩事多身無財物家無少康嘗負薪於市中
鬻薪以自給其妻亦善績織常與人共分其利後人呼之
曰孔門之南風子也亦有子曰孔汲字子思亦善學孔
子之學子思之學又傳於孟懿子孟懿子之子孟懿子
名申字子孫申之子孟懿子字子產

今度城事は既に終り候。御内閣は甲子せきを定め、内閣及他五社公
祝祭に於て了勿編にて丸太手を破る事も終りて猪お入らる
丸太内大字駿河山より主あるまきと二丸を経て風とて原山若狭
を下る丸太支線にて御内閣東洋門を寸北もすく二重之塗を五差
地筋の内中院三院玉索にて其處へもうち附するものと化す
輕き事は済合の事あるべからず。若狭御内閣と軽いやうに
と改め難い。相模御内閣安井義直自代て馬を下したる及馬と
並日向あはれ兵上使古馬とらむ。二丸太手の玉索入る内閣軍場
村下晴乃と申す御内閣より御事の手帳と名づけたる事あり
御内閣御内閣を負付元と申被費附と申す内閣御内閣

故やうりと一萬赤一萬昇大物を細川公重が於後山に因る
者我あらかず。今後子孫の西川復活武運とあり。世をめぐ
る事無く。おほきもの。其の末裔松井一九三。はくす。対箕義
所。源氏の後世。有情記置くも也。

寛永十九年三月

原城記一本肥後遠山 所藏弘化丁未
借覽贍寫裝為二本

赤羽美術館

